

令和 6 年度用「Junior Sunshine 5・6」複式学級指導計画(案)

学期	合計 時数	A 年度		B 年度		
		单元名	時数	单元名	時数	
1 学期	26	①	Hello, everyone. (5 年 L1)		4	
		②	This is me. (6 年 L1)		4	
		③	Welcome to Japan. (6 年 L2)	8	When is your special day? (5 年 L2)	8
		④	What time do you get up? (6 年 L3)	8	What do you have on Mondays? (5 年 L3)	8
		⑤	Let's Check ①・Our World ① (6 年)	2	Let's Check ①・Our World ① (5 年)	2
2 学期	26	⑥	(共通单元) My Summer Vacation (6 年 L4)		4	
		⑦	Where do you want to go? (6 年 L5)	8	I can draw pictures well. (5 年 L4)	8
		⑧	Where is the station? (5 年 L5)	8	What would you like? (5 年 L6)	8
		⑨	(共通单元) My Best Memory (6 年 L6)		4	
		⑩	Let's check ②・Our World ② (6 年)	2	Let's check ②・Our World ② (5 年)	2
3 学期	18	⑪	I love my town. (5 年 L7)	8	My Hero (5 年 L8)	8
		⑫	(共通单元) My Dream (6 年 L7)		4	
		⑬	(共通单元) My Junior High School Life (6 年 L8)		4	
		⑭	Let's check ③・Our World ③ (6 年)	2	Let's check ③・Our World ③ (5 年)	2
合計	70					

A 年度・B 年度方式における複式学級指導計画（案）について

複式学級とは、2 つ以上の学年の児童を同じ学級として編制するものである。小学校では 2 学年合計で 16 人以下（1 年生を含む場合は合計 8 人以下）となる場合に編制される。複式学級における外国語科の指導では、教室と指導者の数に余裕がある場合は、5 年生と 6 年生を別々に指導し、発表ややり取りなどの場面で合同授業を行うことも考えられるが、5・6 年生を一緒に指導することが一般的である。そこで、5・6 年生が同じ教室で同じ内容の授業を受ける場合の年間指導計画案を示した。

「小学校学習指導要領」において、外国語科では、学年ごとの指導目標や内容は示されておらず、2 学年間を通じて外国語科の目標の実現を図ることとされている。したがって、2 年間を通じてすべての単元の学習を実施する A 年度・B 年度の年間計画を示した。今年度は A 年度で行うとしたら次年度は B 年度を、今年度 B 年度としたら次年度は A 年度の順に、2 学年分の内容を学習することとなる。

A 年度の計画に 6 年生の内容が多く含まれるのは、すでに 5 年生の学習内容を経験している新 6 年生が学びを深められるように考えたものである。学校の実態に応じて、B 年度の計画からスタートさせてもよい。

また、①②⑥⑨⑫⑬については、学習内容を考えて、2 年間繰り返し取り扱いながら学習を深化させることとしている。そのため、単元あたりの授業時数も少なくなっている。

指導上の留意点

- ・複式学級は 5 年生と 6 年生が同じ教室で授業を受けるため、学習歴や習得の差に配慮した指導をする必要がある。5 年生は 6 年生より学習経験が少ないことから、各単元の導入においては 5 年生をより意識した指導をしたい。そのことが、6 年生にとってよい復習の場にもなる。また、こうした差を生かして、6 年生が様々な活動の中で 5 年生のロールモデルとなったり 5 年生をリードしたりするような活躍の場を作るようにしたい。その際、5 年生の児童が「6 年生にはついていけない。5 年生には難しい」などと意欲をなくすことがないように配慮と指導が必要になる。児童理解に基づいた適切な指導や支援が求められる。
- ・2 年間繰り返し指導する①②⑥⑨⑫⑬については、5 年生と 6 年生で到達目標に差をつけたい。例えば単元の最後の活動 (Activity 3) では 6 年生が主に話す側、5 年生はそれを聞いて理解する側とするとよい。それにより、6 年生は最上級生としての学習成果発表の場を体験し、5 年生は 6 年生への憧れをもつとともに、来年度の到達目標を認識することにつながるであろう。